

117期通信

北海道小樽潮陵高等学校 1 学年通信
令和2年 11 月 18 日(水) 発行 第19号
潮陵 1 学年団

☆大学入試の仕組み

現在、君たちは文系・理系を選び、2年生の選択科目について考えています。さらにその先を見据えると約2年後には大学受験が待っています（もちろんその他の進路を選択する人もいますが）。今回は大学入試の仕組みについて紹介します。大学入試は大きく分けて「一般入試」、「学校推薦型選抜（推薦入試）」、「総合型選抜（AO入試）」の3種類です。

「一般入試」は、試験当日の得点（国公立大学は、大学入学共通テストと各大学で行われる2次試験の合算得点）が合否の大部分を占めている入試制度です。

次に「学校推薦型選抜（推薦入試）」についてです。一般入試に次ぐ規模の選抜方式で、国公立大学では全体の9割以上の大学が実施しています。近年は、東京大学や京都大学などの難関国立大学でも導入されるなど、広がりをみせています。学校推薦型選抜は、大きく分けて「公募制」と「指定校制」の2タイプに分かれます。「公募制」は、大学の出願条件をクリアし、学校長の推薦があれば受験できる選抜です。一方「指定校制」は大学が指定した高校の生徒のみを対象とした入試制度で私立大学が中心です（本校の規程は上記参照）。国公立大学の学校推薦型選抜は、私立大学に比べて募集人員が少なく、出願条件のうち「学習成績の概況 4.0 以上」など厳しい成績基準を設けている大学があるほか、1校からの推薦人数の制限がある場合は出願前に学校内で選抜が行われます（小樽商科大学は1校から4名）。大学での試験は様々ですが、2021 年度入試からは、小論文など受験者自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法のほか、プレゼンテーション、口頭試問、実技、教科・科目に関わるテスト、資格・検定試験の成績、共通テストなど、学力を確認する評価を実施することが必須となります。

< 総合型選抜の主なパターン >

選抜型

国公立大学や難関大学に多いパターン。選考方法は、小論文やレポートを課したり、長文の志望理由書や自己推薦書などを課してその内容をもとに面接するなど受験生の負担も大きい。

対話型

私立大学に多いパターン。複数回の面談・面接を行い、学力面より人物評価や意欲、志望動機などを重視する。

実技・体験型

入試プログラムの中に、模擬授業やセミナー、実験などが含まれ、その参加が出願条件となる。その後、レポート・課題提出などで選考を行う。

指定校推薦に関わる本校の規程（進路関係資料より抜粋）

- ①推薦基準を満たしていること。
- ②学習成績、特別活動の実績、生活状況(欠席日数、遅刻がほとんどない等)を総合的に判断する。
※医学部の場合は、医進類型での活動も含む
- ③受験資格に学習成績が示されていない場合には、B段階(評定平均 3.5 以上)を目安とする。
- ④評定に「2」がある場合は、指定校制推薦に望ましくない。
※公募制の場合も、基本的には指定校制に準ずるが、①、②を中心に審議する。

最後は、第3の入試と言われる「総合型選抜（AO入試）」です。この入試制度は、エントリーシートなどの受験生からの提出書類のほか、面接や論文、プレゼンテーションなどを課し、受験生の能力・適性や学習に対する意欲などを総合的に評価する入試方式です。従来の入試方式と比べると、「高い学習意欲」や「学びへの明確な目的意識」が選抜基準として重んじられているため、選抜方法もその点が判断できるような内容となっています。出願時に受験生自身が作成して提出する書類が多いことも特徴で、決して易しい制度ではありません（左記参照）。

2年後、どの入試制度を利用するか未定の人が多いでしょう。君たちが受験する 2023 年度入試は、さらに入試制度が多岐に渡ると言われています。今すべきことは、大学の入試科目などを調べることはもちろん、自分自身どんな入試制度にも対応できるような学校生活を過ごせているか、日々の生活や授業について見つめ直すことかもしれませんね。